

編集委員会便り

新年明けましておめでとうございます。本誌は今年で第13巻を迎えることになりました。何卒、今後とも宜しくご愛読下さるようお願い致します。従来、この欄では主として特集成立の経緯と意義について報告して参りましたが、新年に当たり、編集委員のご紹介を致したいと存じます。まず、委員のうち、ご経歴が長く、また比較的年長の方からそのプロフィールを述べてゆきたいと思ひます。

まず、服部正策氏(湯浅電池、最高技術顧問)は、当委員会の古参であり、電池関係のご専門のみならず国際的視野から顧問の立場でコメントを賜わっております。因みに氏は英語がとても堪能であります。



服部正策氏

鈴木健二郎先生(京都大学、機械工学)は創刊当時から委員として編集に参画されておられ、また初代委員長(故)佐藤俊先生(京大、機械工学)の愛弟子でもありました。人柄円満、折目正しく、また律義な



鈴木健二郎先生

完璧主義者のようにお見受けします。当学会の総務委員会副委員長でもあります。

中西重康先生(姫路工大、産業機械工学科)もまた創刊以来の功労者であり、皆勤に近い精励振りで、その屈託のないお人柄と要点を衝くご発言は貴重なものがあります。なお、先生は日本酒党であって、この方面のご造詣が深い方です。



中西重康先生

今回は紙面の都合上三名の方にとどめ、次に毎号の例にならない、今月の担当者から特集について述べます。

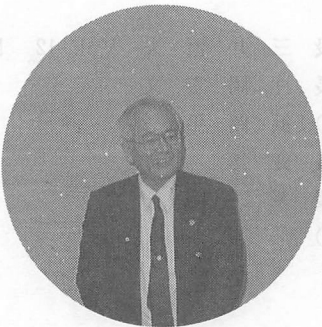
我国には、発電用原子炉が既に40基ほど稼動しており、電力の約4分の1は、これらの原子力発電所から供給されている。したがって、原子力は、もう我々の日常生活の中にすっかり入り込んでしまっている重要なエネルギー源である。

しかし、ソ連のチェルノブイリで発生した原子炉の重大事故や、最近、関西電力美浜2号炉で起った問題などをとりあげ、原子力とその安全性がいろいろところで厳しく論じられている。そして、その一方では、地球の温暖化をひき起すとされるCO₂を排出せず、中東情勢の不安定さにもほとんど影響されない原子力への関心や期待が高まってきている。

本誌では、創刊以来、原子力に関連する特集がすでに2回組まれている。昭和59年3月号の「原子力エネルギー」と、平成元年3月号の「核エネルギー利用技術の進歩」と題するものである。これら過去2回の特集では、主として原子炉そのものに焦点が当てられていた。確かに、エネルギーは原子炉で発生し、それを人々が利用しているわけではあるが、そのような事を



編集委員会風景



編集委員長 林 宗明先生

可能にするには、例えば、採掘されたウラン鉱から原子炉用の燃料がつくり出される迄には、極めて多くのプロセスをへて、さまざまな技術が駆使されねばならない。また、原子炉から取り出される使用済み燃料は、非常に強い放射能を帯びており、これを処理し、そこからプルトニウムのような有用元素を回収したり、深い地層中に最終的な廃棄処分を実行するためには、他の産業とは少々性格を異にする技術も、いろいろと必要である。

このような、原子炉の周辺に展開されていなければならないさまざまな技術は、核燃料サイクル技術と呼ばれており、それを本号の特集記事「核燃料サイクル技術の開発動向と将来」として取りあげた。目下、青森県の六ヶ所村では、核燃料サイクルに関連する施設

の建設がいくつか計画されており、一部は既に建設中であつたり、運開間近になっている。そのような状況からも、本号の特集は時宜にかなったものであると考えている。

特集は、何人もの執筆者にお願いしてつくらねばならず、実際のところ、原稿が出揃う迄は、内心、不安であった。しかし、本号の特集では、期日に間に合わなかった原稿は一編も無く、ご執筆下さった方々に感謝している。しかし、このまとめ役のような事をおおせつかっていた私は、その慣れない大役の故に、この編集委員会便りの原稿をここまで書き終えて、やっと、肩から荷がおりてゆくような快感を味わっている。ほっとして、窓から見る学内の銀杏の木々は、時に吹く風に葉を散らせながら、秋晴れの陽にキラキラと金色に輝いている。明日の前夜祭を皮切りに、学園祭（11月祭）が始まろうとしている。

林 宗明

(京都大学名誉教授・福山大学工学部教授)

東 邦夫

(京都大学工学部教授)